



ごあいさつ

和良比遺跡は、土地区画整理事業のため、住宅・都市整備公団より委託をうけ、市教育委員会が遺跡の内容を把握する目的で確認調査を行ってきました。

昭和56年3月16日に調査を開始してから、数年を経過しました。

この間、紆余曲折もありましたが、やっと確認調査を終了し、その成果を皆様にお知らせできるようになりました。

本書は、調査の内容、出土品の説明等をできるだけ平易にかみ砕き、どなたにも理解していただけるよう配慮いたしました。

この資料が広く皆さまにご活用されることを望む次第です。

最後に、この調査において、ご指導いただきました県文化課、ご協力いただきました住宅・都市整備公団、また、発掘調査の作業に従事して下さった皆さまに厚くお礼申し上げます。

昭和59年2月16日

四街道市教育委員会

教育長 小川 進



空から見た和良比遺跡
(住宅・都市整備公団提供)

目次

| | | | |
|----------------------|---|--------------------|----|
| ごあいさつ | 1 | IV. 発掘調査のやり方 | 30 |
| 例言・目次・調査参加者名簿 | 2 | V. 調査のまど | 33 |
| I. 遺跡の位置と環境 | 3 | おわりに | 36 |
| II. 調査に至るまでの経過 | 4 | | |
| III. 調査の概要 | 4 | | |

例言

1. この本は、住宅・都市整備公団和良比土地地区画整理事業に伴う遺跡確認調査の概要です。
2. 確認調査は、住宅・都市整備公団の委託により四街道市教育委員会が行い、文化財担当の渋谷芳則・川端弘士がこれにあたりました。
3. この本の内容は、昭和55年度から昭和58年度に至り断続的に行われた、確認調査の資料をもとに作成されましたが、整理途上のためほんの概略に留め皆さんにお知らせします。
4. この本の作製は、小出結花・佐藤喜一郎・飯沼弘子がイラストその他にあたり、秋庭行雄・近藤貴子・西山昌子・羽山孝行らが加わって行われました。編集は川端が行いました。

調査参加者名簿

| | | | | | | | |
|-------|-------|--------------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 調査員 | 宇佐見雅夫 | 昭和56年3月13日～3月31日 | | | | | |
| | 地引孝枝 | 昭和56年4月1日～58年3月31日 | | | | | |
| 補助調査員 | 小出結花 | 昭和57年8月～ | | | | | |
| 作業員 | 尖倉千恵子 | 大川とよ子 | 石山みつ | 大川千代 | 大川直子 | 大川正枝 | 松井律子 |
| | 鶴岡栄子 | 山口千代 | 石山雅子 | 大川シズエ | 大川志津子 | 大川英子 | 高橋よし |
| | 真道美津 | 長嶋春子 | 長嶋照子 | 福井和子 | 大河邦治 | 安藤里子 | 黒木久代 |
| | 大河四郎 | 新井くに | 山口すみ | 小出富子 | 山本正枝 | 佐藤智恵子 | 増田婦美子 |
| | 多田とし子 | 横山時江 | 鈴木智恵子 | 岡本国蔵 | 千葉光子 | 河内菑代子 | 高野しげ |
| | 鶴田末子 | 四宮とよ子 | 高橋克子 | 大川たま | 近内八重子 | 鶴岡春吉 | 田中文吾 |
| | 宮崎三喜雄 | 鶴岡つる | 大河馨 | 斎藤美智恵 | 鈴木正子 | 高松慶子 | 鶴岡重夫 |
| | 大竹恵美子 | 内田広幸 | 大川繁夫 | 石橋良行 | 秋庭行雄 | 佐藤喜一郎 | 石井秀樹 |
| | 後藤和夫 | 楢木敏之 | 柘植宗浩 | 尾形昌志 | 田沼晋吾 | 大川孝幸 | 重野能徳 |
| | 円城寺正志 | 立田忍 | 羽山孝行 | 伊藤伸久 | 野本道成 | 三島木光男 | 船戸英史 |
| | 道井秀行 | 栗山忠之 | 船戸勝彦 | | | | |
| 整理員 | 飯沼弘子 | 近藤貴子 | 西山昌子 | | | | |

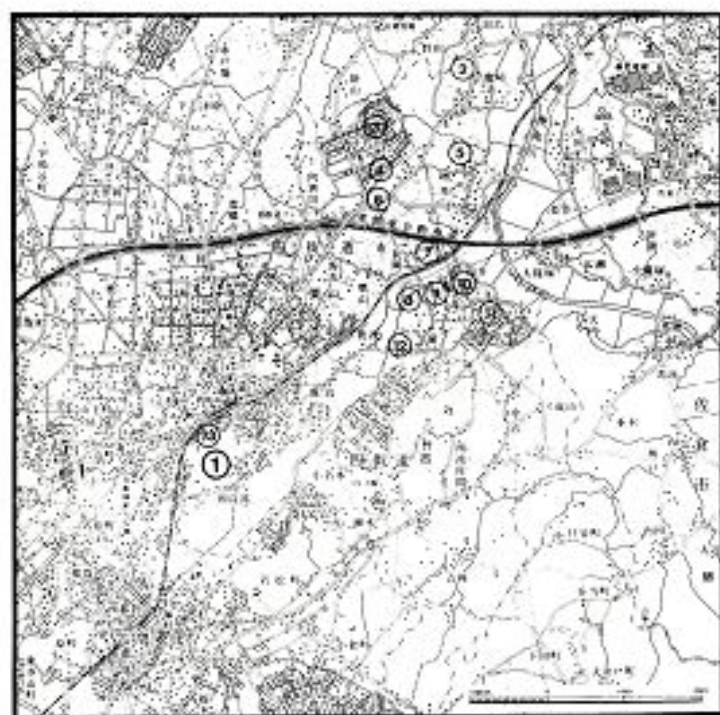
I 遺跡の位置と環境

和良比遺跡は、国鉄総武本線四街道駅の南方300mほどのところにあり、従来「和良比のお山」とよばれ人々に親しまれてきました。

大半が山林で、樹齢100年をこえる大木が枝をひろげ、ひっそりと湿った「お山」をつつんでいました。子どものころ、うさぎがはねるのを見たり、きじの鳴き声を聞きながらかくれんぼや冒険ごっこをして遊んだ話も聞かされています。このようなところにも、最近の都市化現象は徐々に進行しています。駅に近く交通の便がよいこの地域は、北側の谷にわらびが丘団地が完成しており、しだいに人々の実生活の場へとうつり変わろうとしています。

このような環境の中で遺跡は、面積250,000m²、標高28～30mのあたかも舌を突き出したような形をした台地になっています。台地の下には、およそ14mの標高差をもって、和良比に水源をもつ小名木川の支流がながれています。この川は鹿渡支谷を北上し、印旛沼に注ぐ鹿島川へと合流しています。鹿島川流域は県内でも有数の遺跡の宝庫とされており、わたしたちの四街道市側にも、原始から古代にわたる人々の生活のあとがたくさん残っています。今までに発掘調査し報告されている遺跡をあげてみましょう。まず、小名木川の南側沿いの地域は縄文時代早期から後期の前広貝塚を代表とし、井戸作・川戸下・相ノ谷・西向井遺跡など縄文時代早期から古墳時代にわたる遺跡が点在しています。北へ向かい物井のほうでは、千代田遺跡をはじめ米山・入の台遺跡・物井1号古墳など先土器時代から奈良・平安時代の遺跡や、中世の城であった古屋城跡の井戸が調査報告されています。

(川端弘土)



- | | |
|-----------|----------|
| ① 和良比遺跡 | ⑫ 米山遺跡 |
| ② 千代田遺跡 | ⑬ 八木原貝塚 |
| ③ 古屋城址 | ⑭ 物井1号古墳 |
| ④ 入の台遺跡 | ⑮ 川戸下遺跡 |
| ⑤ 相ノ谷遺跡 | ⑯ 西向井遺跡 |
| ⑥ 前広貝塚 | ⑰ 井戸作遺跡 |
| ⑧ 和良比向井貝塚 | |

遺跡の位置 (国土地理院 千葉・佐倉)

II 調査に至るまでの経過

住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部より、昭和53年6月に和良比土地区画整理事業の計画がある旨の照会がありました。

これに基づき、和良比地区（事業予定地）に遺跡がどのくらいあるか調べた結果、縄文・土師式土器散布地3ヵ所、中世城址（堀込城）1ヵ所、塚4基が存在すると、千葉県教育庁文化課より回答がありました。

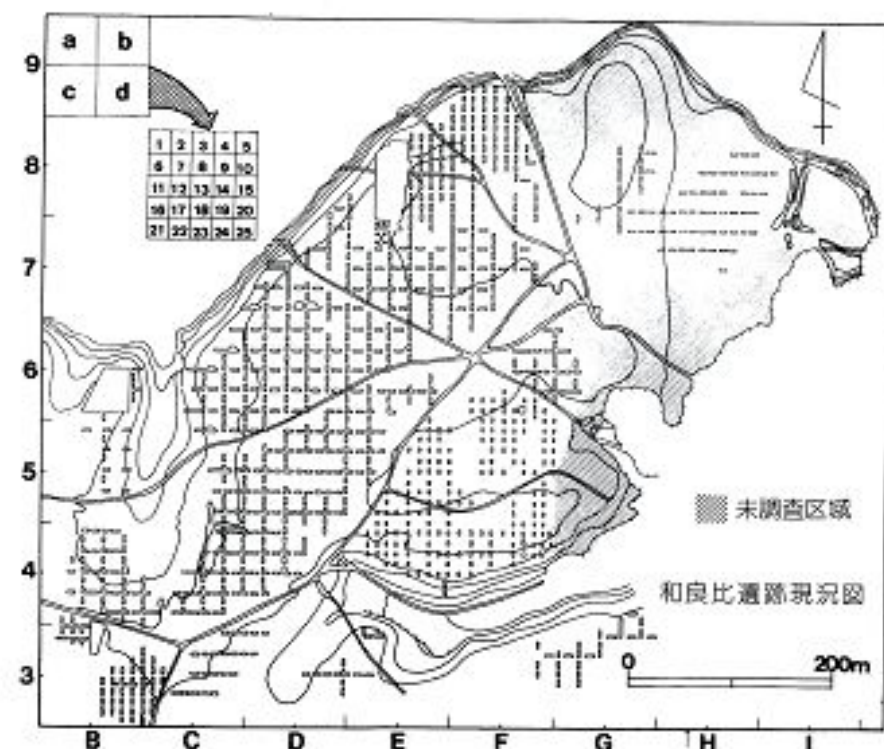
今後、この遺跡をどのようにするか千葉県教育庁文化課、住宅・都市整備公団、四街道市教育委員会の三者で協議を持ち、記録保存の処置をとるということになりました。

調査機関として、千葉県教育委員会教育長より、四街道市教育委員会が指定され調査を始めることになりました。

確認調査は、四街道市教育委員会が昭和56年3月より、縄文式土器散布地である台畑地区（面積14,632 m^2 ）から開始しました。（渋谷芳則）

III 調査の概要

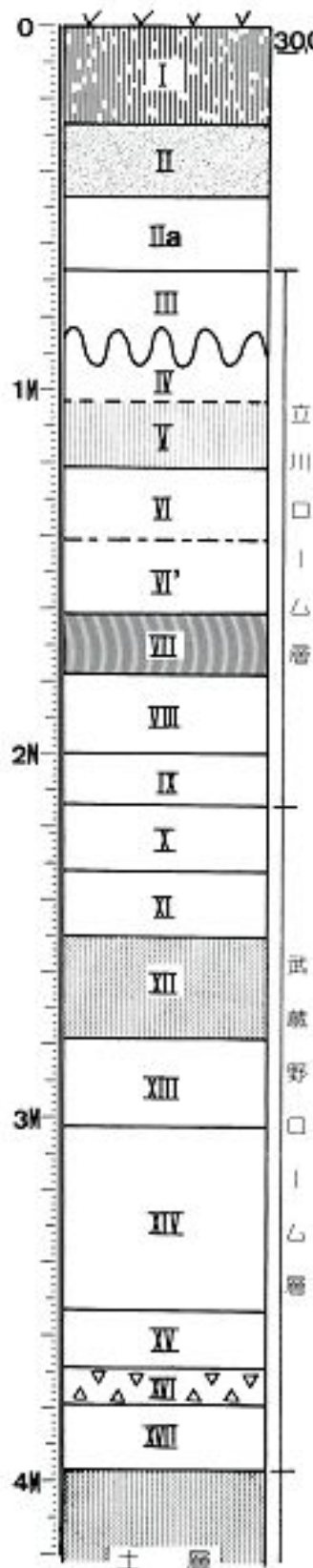
確認調査は、昭和55年度から昭和58年度にわたり断続的に行われてきました。対象とする調査区域の面積は220,000 m^2 に及びました。では、確認調査とはどのようなことで、どのように行われてきたのでしょうか。和良比遺跡では、この区域に地球上の緯度と経度にそった



（東西南北）一辺10mの区画（グリッド）を、碁盤の目のようにたくさんつくります。そしてその区画線にそって、幅2m、長さ4m～8mの試し掘りをする場所を設定します。これはトレンチとよばれ、わたしたちはこのトレンチをスコップで掘って行くわけです。

出土した土器や石器などの遺物は、グリッドにつけられた番号にしたがって採

集されます。そして、^{なてあなこのうきよし}堅穴住居址などむかしの人々が生活していたあと（^{いこう}遺構）が発見されたときは、その形をグリッドをもとにして図面に写しとります。そのようにすれば、どこにどのような遺物や遺構が発見されているかすぐわかるわけです。このようにしてつくられた図面では、さらにどのような土層から発見されているのかを示さなければなりません。遺跡の土層は、



遺跡の歴史を知る手がかりになるからです。ふつう、土層は地面より下に行くほど古くなっています。現在わたしたちが歩いている地面があるように、むかしそれぞれの時代の人々が歩いていた地面も長い年月の間に埋まり、いく^{くも}重もの土層を形成してきました。和良比遺跡では、これらのことに注意しながら変化していく土層（左の図は和良比遺跡の基本的な土層図です）にしたがって、順にトレンチを掘り下げて行きました。出土した遺物や遺構はどの土層から発見されたのか記録されます。

このように、遺物や遺構がどのような範囲で広がっているのか、どのような土層の中に埋まっているのかを調べてきました。これを確認調査とよんでいます。確認調査は、今後行われる本格的な調査（本調査）で、どこをどのように調査したらよいかを考える資料となります。

土層の説明

第I層—わたしたちが歩いている地面です。木の根などでみだれた層です。第II層—黒褐色土層、戦国時代以後の陶器片などが含まれています。第II_a層—暗褐色土層、縄文時代の遺物が含まれています。

第III層—黄褐色土層、ソフトロームとよばれ先土器時代の遺物が含まれるようになります。第IV層—黄褐色土層、ハードロームとよばれます。

第V層—微妙に黒みがかっているが明確ではありません。第VI・VI'層—黄褐色をしているがVIはVI'より白っぽくみえます。ここでも先土器時代の遺物が含まれています。第VII層—暗褐色土層—立川ローム第II黑色帯とよばれています。和良比遺跡ではこの層まで先土器時代の遺物が含まれています。第VIII層—黄褐色土層、オレンジ色の粒子を含んでいます。

第III層から第IX層までは立川ローム層とよばれ、以下第X層から第XVII層までは武蔵野ローム層とよばれています。

(川崎弘士)

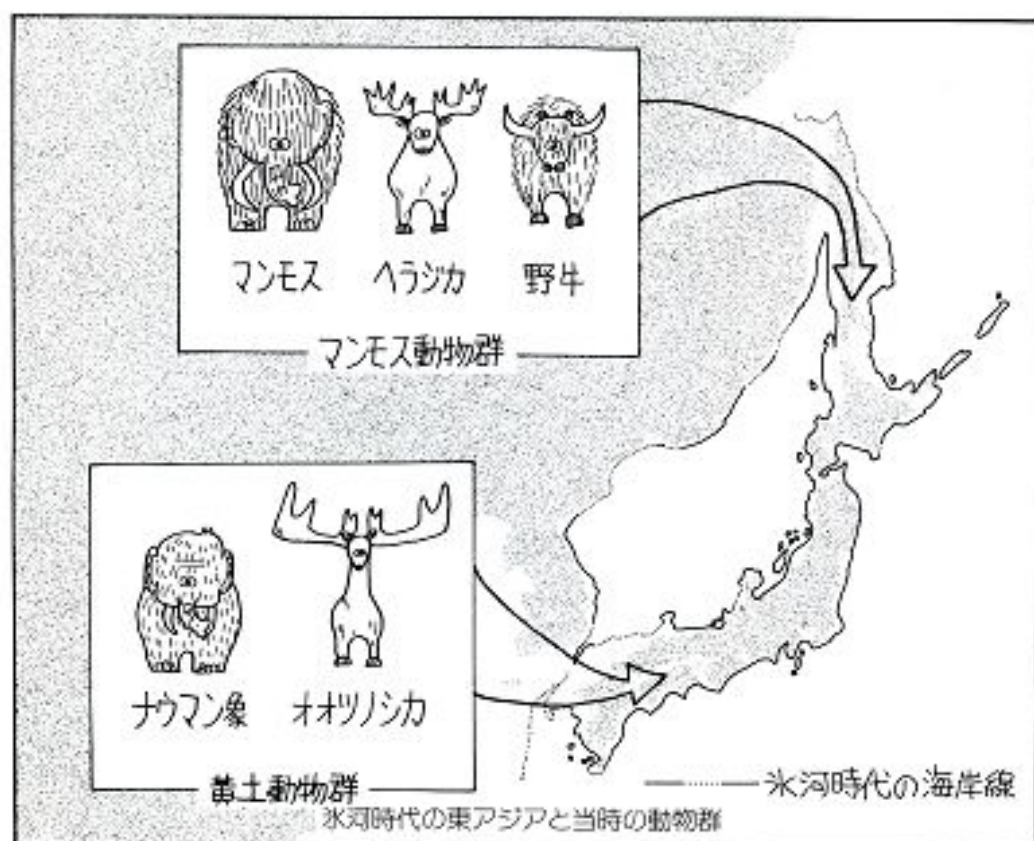


1. 先土器時代の和良比

約1万年前まで続く日本最古の文化は、先土器時代せんどきじだいといわれる時代に属します。まだ土器の使用を知らなかった当時の人々が、すでに和良比の台地を駆けまわっていたことが、これまでの調査からわかってきました。

先土器時代の人々が生活した時代は、氷河時代ひやうがじだいともよばれています。といっても、日本全土が氷河におおわれたことはなく、ただ、年間の平均気温が現在よりも7度程度低かったといわれ、ちょうど和良比のあたりは今の札幌くらいの気候であったようです。

日本列島にいつごろから人間が住みだしたかということは、実は氷河と大きな関係があるのです。一口に氷河時代といってもずっと寒かったわけではなく、寒い時期ひやうき（氷期）と暖かい時期かんびょうき（間氷期）とが交互にやってきたようです。さらに、氷期の中でも特に寒い時期あひやうき（亜氷期）と比較的暖かい時期あかん（亜間氷期）がありました。氷期（亜氷期）になると地球上の水分がこおりつき、高緯度の地方では氷河が発達しました。その結果海の水が少なくなり、海のあざいところは陸地になってしまいました。そして間氷期・亜間氷期がおとずれると、氷河がとけだして再び海水面が上がりました。こうした作用によって、日本列島は大陸と地続きになったり、はなれたりをくりかえしたようです。大陸と地続きになった時に、大陸の動物が陸地になった部分を渡ってはいってきました。そうした動物の群れを追いかけて人間もはいってきたので



大陸と地続きになった日本列島には、まづ50～15万年前に舊土動物群が、そして9～4万年前にはマンモス動物群がはいってきたといわれています。

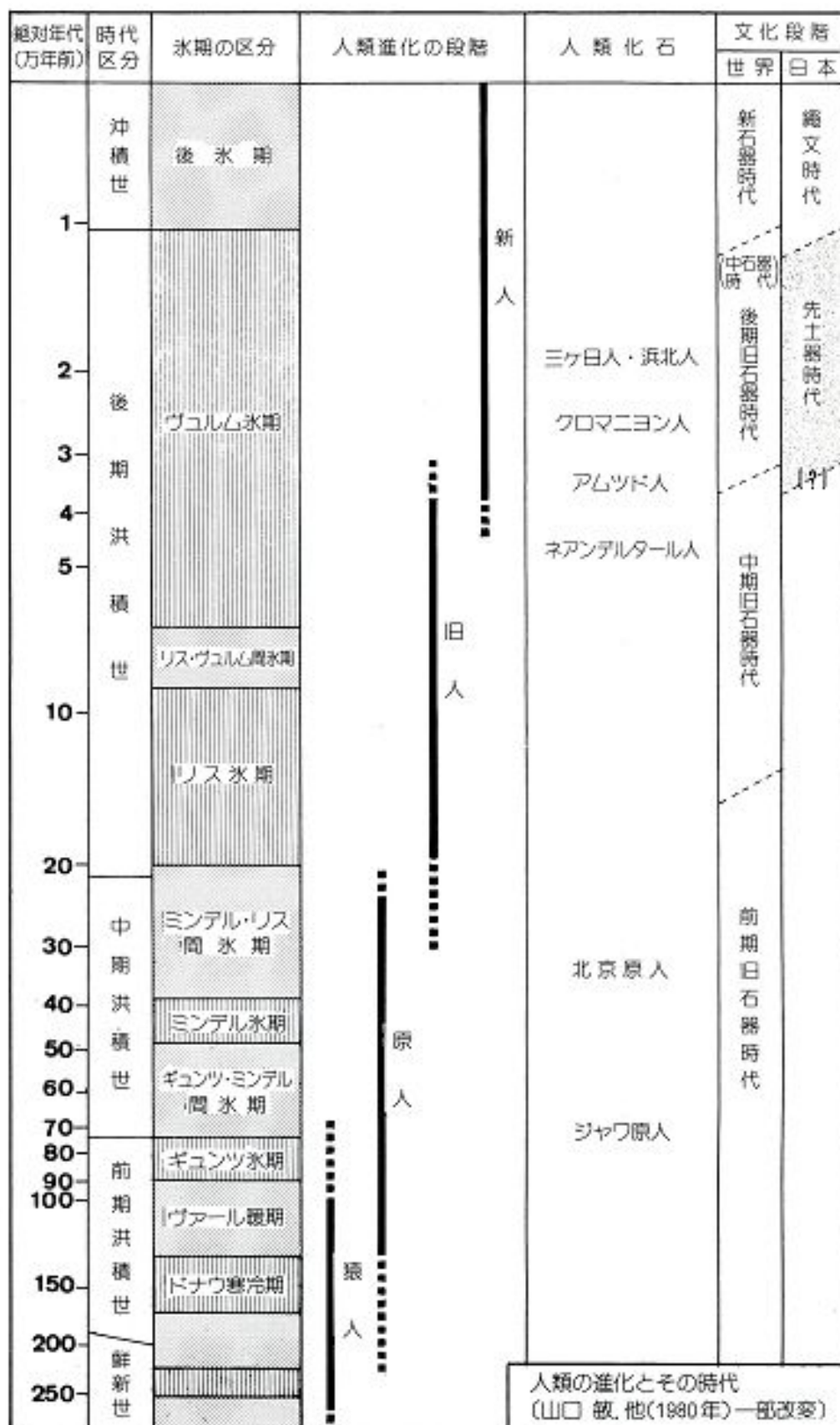
しょうが、それがいつのことだったのか、まだはっきりしていません。最近宮城県より、世界史でいう中期旧石器時代にあたる時期に属する遺跡がいくつか報告されていますが、これまでに調査された遺跡はほと

んどが3万年前よりも新しい時代、世界史の後期旧石器時代（ラスコーなどの洞穴壁画が残された時代）に相当します。

さて、現在よりもかなり寒かった当時の関東地方では、草原が広がりまばらにマツなどの針葉樹の林がみられたようです。

広い草原に、ナウマン象やオオツノシカが群れをなして草をはんでいたのでしょうか。先土器時代人は海へ出ていくことはせず、こうした動物を狩って食料としていたようです。したがって、動物たちが移動すればそれにあわせての移動生活をおくっていたものと思われる。和良比の台地でも、槍をもって大きな動物たちをおいかけていった人々がその足あとをのこしていったのです。

(小出結花)





先土器時代遺跡の発掘調査

— 先土器時代人の生活を求めて —

四街道あたりでは、台地を1mも掘り下げると関東ローム層、いわゆる赤土が顔を出します。実はこの赤土が、先土器時代人が生活をおくった時代にさかんに降った火山灰の層なのです。関東ローム層を掘り下げていくと、石器を出土する層（文化層）にあたる可能性があります。これは、その場所に1万年よりももっと古くから人間が生活していた証拠となります。ところが、どんなに慎重に掘ってみても、日本では石器以外の証拠——家のあと、木や骨でできた道具、人や動物の骨など——は、ほとんど発見できません。このようにとぼしい過去の情報から少しでも当時の生活の姿を復元するために、次のような分析が行われるのです。

文化層をていねいに掘り下げていくと、出土する遺物は普通数地点にかたまっていることが確認されます。同じ時期に残された、こうした集中地点をおさえていくことが、当時の人々の行動を研究するための基本的な作業となります。当時の人々には、狩りという行動の場があり、とらえた動物を解体した場があり、それを料理した場があり、石器をつくった場があったでしょう。こうした行動が行われた結果としてその場所に石器などが残され、それが遺物出土の集中地点として今日私たちの知るところとなるのです。したがって、1つの集中地点に含まれている石器の種類などを明らかにすることによって、そこでいったい何が行われたのか具体的に推測できることもあります。また、台地上、さらには周辺の遺跡で調査されたすべての同時期の



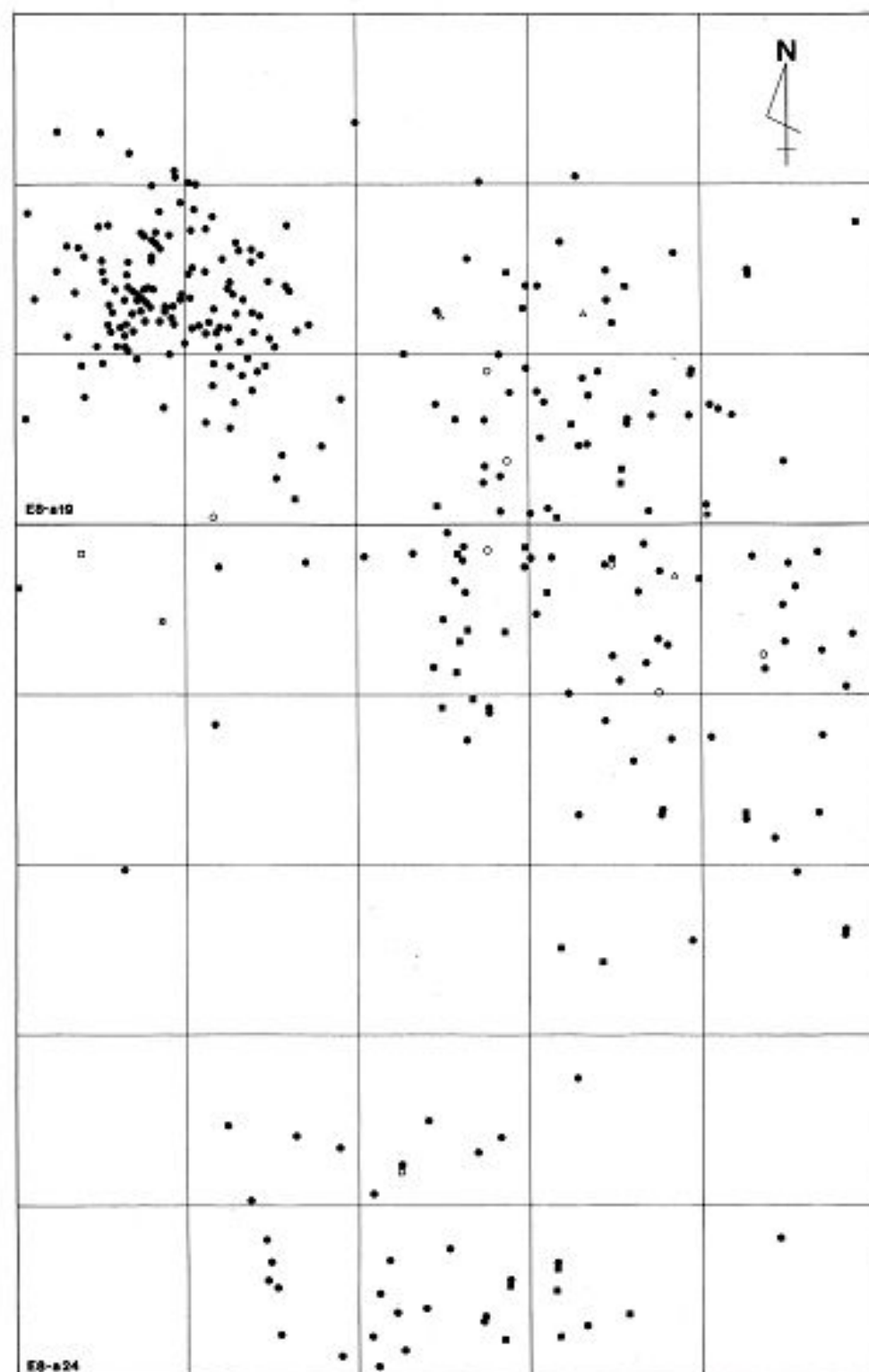
文化層は、移植ゴテ(シャベル)で注意深く掘り下げます。遺物が出土すると、その場所に竹串をさし、とおし番号をつけたラベルをつけておきます。



ある程度掘りあがったら、とおし番号をつけたそれぞれの遺物がどこから出土したか、平面的な位置と標高を図面に記録していきます。

集中地点を分析し、各集中地点の特徴やそれぞれの関係をつかむことができれば、当時の人々の行動に一步近づくことができるかもしれません。ただ、1つ1つの石器が何に使われたのかを正しく言いあてることは大変むずかしく、こうした分析にとって大きな問題となっています。

一応、現在考えられているさまざまな先土器時代の石器の使われ方を次のページに紹介してありますので、参考になさってください。 (小出結花)



左の図は、和良比遺跡で約1万年前の石器がどのようにちらばって出土したかを示しています。ここには3つの出土の集中地点があるのがわかります。

北西の集中地点は、範囲は小さくても密に分布しており、黒曜石でできた小型の刮片・碎片で占められていました。その南東に位置する大きな集中地点はまばらに分布していますが、加工された道具が含まれ、また石材も豊富です。さらに南端の集中地点は規模も小さくまばらで、白っぽい黒曜石と焼けた礫が多く出土しました。

このようにほぼ同じ時期の、すぐ近くにある集中地点でも異った特徴をそれぞれ持っています。

- 尖頭器
- ナイフ形石器
- ▲ 石核
- ◇ 加工良・使用痕のある刮片
- ▣ 礫片
- 刮片・碎片

0 10m

遺物出土分布図
(約1万年前)



尖頭器
(ポイント)

(和良比遺跡出土)

先をとがらせてつくられた石器。柄をつけて石槍として使われました。

ナイフ形石器

(和良比遺跡出土)

刃にする部分をのこして、まわりを刃つぼみした石器。和良比で出土したものは、形が似ているので切出形とよばれており、ものを切るのに使われたとされます。

彫器
(スライバー)

(印旛郡白井町便山谷遺跡出土)

打撃を加えて彫刻刃のような刃をつくりつけた石器。木や骨に溝をほるのに使われたようです。